

Noism0+Noism1+Noism2 『春の祭典』

今年 2021 年は、20 世紀を代表する偉大な音楽家イーゴリ・ストラヴィンスキーの没後 50 年に当たります。そのストラヴィンスキーの代表作といえば《春の祭典》。毎年必ず世界のどこかで演奏されている、クラシック音楽好きなら誰でも知っているこの楽曲は、舞踊上演のために作曲された舞踊音楽です。

初演は 1913。振付を担当したのは、20 世紀を代表する天才舞踊家ヴァツラフ・ニジンスキー。バレエの技法を真っ向から否定したその振付は、その後に来るモダン・ダンスの時代を先取りし、その前衛性によって客席に賛否の渦を巻き起こし、初演のスキャンダルは舞踊史の伝説となっています。

その後、再びこの楽曲が伝説を生んだのは 1959 年、私の恩師モーリス・ベジャールの振付によってです。未だ男性舞踊手が女性のサポート役に徹していた時代に、獣の群れのような男性群舞によって始まる振付は、当時欧州を席卷していた実存主義の思想とも相まって、その後のバレエの歴史を変えたとも言われています。

そしてこの 7 月、満を持して Noism が『春の祭典』を発表します。

舞踊家たちはそれぞれ個別の楽器を担当し、その音色及び拍子に合わせた振付を実演します。舞台転換、すなわち照明が点いたり、美術が昇降したりといった演出も全て、割り振られた楽器の音色に合わせて実行されます。要するに観客が目にする全ての動きは、本楽曲の音楽的構造の可視化なのです。

そして“生贄に選ばれた乙女が死を迎えるまで踊り続ける”という楽曲の原案は、現在の社会状況（パンデミック）に照らし合わされて、オリジナルの物語として可視化されます。それは**シンフォニック舞踊（音楽の可視化）**と、**ストーリー舞踊（ドラマの可視化）**の共存という、**Noism が目指す 21 世紀の舞踊そのものです。**

政治、経済、科学（医学）技術と、あらゆる社会構成要素が国際的なパワーバランスと不可分である社会を生きる私たち。新型コロナウイルスの蔓延した世界を生きる私たちにとって、一体誰が被害者で誰が加害者だと言えるのでしょうか。誰が、何に対しての生贄なのでしょう。その問いに真っ向から向き合い、現代人による、現代人のための舞踊として創作されたのが、Noism 版『春の祭典』です。

Noism を未だご覧いただいたことがない方も、一度は見た事があるけれどその後足が遠のいている方も、是非この機会に、Noism を観に劇場へお越しください。皆様のご来場を、心よりお待ちしております。

(金森穰 / 演出振付家・舞踊家)

